

< 海外情勢 >

## 好機到来!

大転換時代の勝利者となれ! アジアが輝く時代がやってくる

### 人類文明の転換期…その最前線は極東

あと1カ月余で平成が終わり…新天皇を戴く新元号の時代となる。

世の中が何となく不安定で落ち着きがないのは、新元号・新天皇即位が間近に迫っていることも理由の一つだろう。

いろいろな表現が使われているが、人類はいま大きな変革期を迎えている。

七百年に一度の変節期とか大転換などと分析する人たちもいるが、そんな単純なものではない。人類の歴史がいつ始まったかはともかく、私たち現生人類の祖先である「新人」が世に現れてから20~25万年が過ぎた。

私たち人類がこれから迎えるのは、人類史上最大の変革期となるはずだ。

それを体験できるということは途轍もない幸運である。

しかも心がけ次第では、舞台やリンクの中央に駆け上り自分が出演するチャンスまで用意されている。大変革は、まず金融界の崩壊から始まるだろう。

早ければ今年…来年…再来年あたりから次つぎと金融界を揺るがす大事件が世界中で起こり、数年あるいは十年くらいの時間をかけてクラッシュしていく。

国債・株券・有価証券すべて紙切れとなるだろう。当然のことだが、価値観が大きく変わっていく。世界の金融・経済がリセットされると表現したほうが、分かりやすいかもしれない。金融界の崩壊が始まるころには、世界のあちこちで物理的な衝突…軍事衝突…戦争が起きるはずだ。国境線も変わるだろう。

宗教や民族といった枠組みも崩れ去る。そんな変革が目の前に迫っている。

金融界を揺るがす大事件が、いつどこで起きるかは定かではない。

欧州・南米・中国・米国・日本…世界中のすべての国や地域が危険な爆弾を抱え

ているのだから、何処で爆発してもおかしくないし何処かで爆発すれば世界中に連鎖する。金融界だけではない。宗教や民族の対立…価値観の対立も同様で、いつ…どこで爆発しても不思議ではない状態にある。こんな世界で潜在的なエネルギーを溜め込み、真っ先に新しい世界に突入していくのは東アジアだと考えられる。

現状を破壊するエネルギーは、世界中に満ち溢れている。だが破壊の後に新しい世界を生み出すのは東アジアだ。人類史を塗り替えるような爆発力は、東アジアにしか存在しない。人類史は東アジアから塗り替えられ、その認識を胸に秘めて世界を、そして東アジアを見つめてみたい。

## 米中貿易戦争は中国共産党潰しが目的

東アジアで注目すべきは、中国・朝鮮半島そして日本だ。いずれも大きな問題を抱えている国であり地域である。これらの現状と未来を俯瞰するには、ときに歴史を振り返る必要も出てくる。まずは東アジアの巨大国家「中国」を眺めてみたい。

トランプは大統領就任以前から、**米中の貿易不均衡**を口にしてきた。

2017年1月にトランプが大統領に就任した直後の4月に**習近平国家主席**が訪米。

ここで米中間の貿易不均衡が是正される方向で話し合いが進んだが、実質的に不均衡是正の内容が詰められた訳ではなかった。その7カ月後にトランプが訪中し、米国から中国への輸出を中心とする巨額商談の覚書が調印されたが、拘束力のない覚書は意味をなさなかった。

こうした経緯を経て米国は、昨年(2018年)春に太陽光パネルや洗濯機など、中国製品の幾つかに重い関税をかけると発表。これに対して中国は即座に反応。

米国が追加関税をかける前に、果物など128品目に対し報復関税を行うと発表。

米中貿易戦争は一気に本格戦に突入した。米中貿易戦争の激化は、米国・中国だけではなく世界経済に多大な影を落とす。両国の鏖迫(つばぜ)り合いが続けば、中国が圧倒的に不利だとする分析は多いが、ひと言で片づけられる問題ではない。

トランプは米国内で軍産共同体との確執を抱え、習近平は中国国内で上海派利権との争闘を繰り広げている。トランプも習近平も一方で米中貿易戦争を戦いながら、一方でこれを利用して国内の敵を弱体化させようと腐心している。

貿易戦争という表層的な面からだけで分析し、解決の方向性を見出すことは難しい。当初は3月中にも行われるとみられていた米中首脳会談は、早くとも4月下旬

にずれ込む見込みだ。さらに習近平の訪米時の扱いを巡って、国賓とするか否かも面子を大切にす中国にとっては重大事であり、それを承知しているトランプは、国賓とするか否かまでディール（取引）の材料にしている。

米中貿易戦争は、米中間の経済問題が本質なのではない。

深奥に米国側の「中国共産党潰し」の狙いが存在している。貿易不均衡を翳（かざ）しながら、トランプ米国は「習近平共産党」を破壊しようと企んでいる。

中国は共産党が一党独裁する共産主義国家である。

※（香港・マカオを除く。また中国国内には共産党の衛星政党が8党存在するが、中国共産党の指導の下で統一戦線を組むことが規定されている）

米国をはじめとする自由主義陣営としては、大国となりつつある中国を自分たちと同じ土俵に引き込みたい。昨年（2018年）10月にペンス副大統領が「邪悪な中国共産党との戦い」という演説を行ったが、ここにすべてが見て取れる。

米国は国家をあげて中国共産党との戦争を宣言し、米国民に対してその覚悟を求めているのだ。しかもペンスの演説に見られる通り、米国の敵は「中国」なのではない。「中国共産党」が敵なのだ。

## 台湾併合を視野に大中華実現を目論む習近平共産党

ペンス副大統領の「邪悪な中国共産党との戦い」という演説に真っ向から反論したのが今年（2019年）1月の「世界経済フォーラム（ダボス会議）」での王岐山副主席の演説だった。

王岐山は「各国の国家主権を尊重し、技術覇権を求めないことが重要だ」と、中国製品排除や輸出規制を強める米国の姿勢を牽制。「中国と米国の経済は互いに欠かせない関係にある。互恵的なウィンウィンを求めるべき」と両国の歩み寄りが必要との認識を示した。さらに米国が中国共産党潰しに動いていることを念頭に「中国5000年の歴史が作り上げた中国共産党」と、中国における共産党の存在意義を説明する。

「中国が将来的な進路を模索する上で鍵を握るのは、中国自らの歴史であり…文化であり…哲学なのである。そこに西側発の制度や価値観が入り込む隙間などない」と、中国の歴史観・価値観が米欧とは根源的に異なるのだから、米国は中国の国内問題に口を挟むべきではないと主張する。

中国の新疆ウイグル自治区で非人道的な弾圧が行われ、民族浄化政策が採られていると米国は主張している。新疆ウイグルのイスラム教徒弾圧に関して、世界各国から非難の嵐が浴びせられていることは現実だ。新疆ウイグルでは米CIAなどの非公然活動が活発だという非公開情報もある。この地域では独立運動を中心に、さまざまな反政府運動が展開されている。外国勢力による中国の分断化作戦は、新疆ウイグルに限ったものではない。チベット各所でも同様な運動が継続中だ。

反政府活動に対する中国当局の取締活動も厳しさを増している。

3月5日に開幕した全人代（全国人民代表大会＝日本の国会に相当）では、米中貿易戦争を念頭に中国の経済成長率を6%～6.5%と低めに抑えているが、軍事費は7.5%増の約1兆2,000億元（約20兆円）と巨費を維持している。だが、この膨大な軍事予算より武警（人民武装警察部隊）の予算のほうが多いのだ。外国との戦争より、国内の取締活動を優先させていることが理解できる。新疆ウイグルやチベットでの独立運動など断固として阻止する！中国政府の姿勢が明確に見て取れる。

国内の独立運動を阻止するだけではない。中国政府はいま本気で台湾併合を計画している。2015年に出版された『チャイナ2049』という本がある。

著者は米国防総省で中国問題を担当していたM・ピルズベリー博士。

この本によると、中華人民共和国建国100周年となる2049年には、中国は米国を抑えて世界の超大国になる野望を着実に歩んでいるというのだ。

この本は米国の軍産共同体が中心となって中国の脅威を煽（あお）っているものだが、ここに「中国が2020年に台湾に軍事侵攻する」可能性が書かれている。

2020年3月には「台湾総統選」が行われる。

昨年11月末に行われた台湾の統一地方選では、野党である国民党が大勝利を収めた。このままの勢いが持続すれば、与党の民進党・蔡英文が総統選で勝利する可能性は低い。だが蔡英文に再選されたら中国本土と台湾の関係は悪化し、統一を希求する中国の思いから遠ざかる。米国は「反中国」の蔡英文支持を明確に打ち出しており、今秋には蔡英文が米国議会で演説する可能性もある。そんな演出をすれば台湾での蔡英文人気は高まり、昨年11月の国民党圧勝の勢いは止まる。

今年これからの世界情勢の展開によって大きく変化するだろうが、2020年の台湾総統選の結果次第では、中国が台湾に軍事侵攻する可能性は高まる。蔡英文の総統再選は、台湾が本土との統一を望まないという意思表示となる。

それは、分断化工作が展開されている中国にとっては命取りになりかねない。

実力行使をしても、台湾を呑み込もうとするだろう。2020年3月の台湾総統選は東アジアにとって非常に重大な意味を持つ。ここで私たちは中国の歴史・台湾の歴史・大陸と台湾の関係を正確に把握しておく必要がある。

## 中華人民共和国建国宣言の天安門に招かれた日本人

日本人の約8割は中国人が嫌いで、同様に中国人の約8割は日本人を嫌っているというアンケート結果がある（「ピュー・リサーチ・センター調査」）。この数字にどれほど真実味があるかは別として、両国の大衆がメディアによる意識操作を受けていると推測できる。多くの日本人は中国との歴史的関係をあまり理解していない。

とくに近現代史に関してはほとんど知らない。「日中関係」といえば、中年以下の層は「田中角栄の日中国交回復」と、それ以降の江沢民政世（1993年～2003年）時代に起きた日本バッシングが印象にある程度だろう。年配者は日清戦争・満洲事変や満洲国建国、その後の日中戦争（日支事変）が記憶にあるくらいではないだろうか。

こうして並べてみると、日中国交回復以外は負のイメージが強い。

それが日本人の「中国人嫌い」に繋がっていると推測できる。現実の近現代史の中では、日本と中国は密接不可分の関係を構築していた。中国が好きか嫌いかは別として、近現代史における日中の関係は記憶しておくべきだと考える。

中国を269年間に亘って支配していた清を崩壊に導き、辛亥革命（1911年～1912年）を経て中華民国を建国した初代臨時大統領・孫文（孫中山）が日本の支援を受けていたことは特筆すべき事実である。孫文の右腕として活躍した陳其美（ちんきび）もまた日本との関係が深い。孫文を継いで中国大陸を統治しようとした蒋介石・毛沢東・周恩来に関しても、その関係が日本では誤解されているように思う。

中華民国国民党軍の蒋介石と共産党軍を率いて戦った毛沢東の2人が奥底で深く繋がっていた事実を、どれほどの日本人が理解しているだろうか。

国民党軍と共産党軍は激しい内戦を経て「国共合作」で合体し、日本を共通の敵とするようになった大東亜戦争（太平洋戦争）が終わった後には、両者は再び敵同士となって内戦を戦い続けた。それから4年後の1949年10月1日に、毛沢東は北京の天安門に立ち「中華人民共和国」の建国宣言を行った。この時点で蒋介石はなお華南3省（広東・海南・広西自治区）と西南3省（雲南・貴州・四川）を統治していた。

大東亜戦争が終わり中華人民共和国建国宣言がなされるまでの4年間に周恩来は、少なくとも3回日本を訪れ中華人民共和国建国に関して、日本の思想家たちの意見を聞いている。

そうした経緯もあり1949年10月1日の天安門に、3人の日本人が正式招待されている。久原（くはら）房之介・秋山定輔・鬼倉重次郎の3人である。招待に応じて天安門に立ったのは、久原房之介1人だけである。久原房之介とは、立憲政友会総裁・大政翼賛会総務・逓信大臣や内閣参議を務めた政治家だが、財界にあっても日立製作所・日立造船の前身となった日立銅山の総帥、日産自動車を創設した人物として知られている（日産自動車は、後に姉の亭主である鮎川儀介に譲渡）。

久原は政界と財界を繋ぐ黒幕とも見られており、2・26事件に連座したため政界から身を引いた人物でもある。ひと言で説明するなら「戦前の日本右翼界の大物」といえるだろう。久原は、また孫文に革命資金を提供した男の1人ともされる。

孫文の辛亥革命を支えた日本人として、久原房之介以外に頭山満や宮崎滔天・梅屋庄吉などが知られるが、孫文と日本人との関係は複雑になるので機会を改めたい。

ここでは中華人民共和国建国に至る「蒋介石・毛沢東の深奥」を見ていきたい。

これに関して詳細を語るには、大長編の論文が必要だ。数冊とか十数冊に及ぶ内容をわずかな紙幅で語るのも、細部は思い切り端折ってしまうが、本質は理解していただけたと思う。

## 2つの故宮博物院に別れた宝物

中国・北京の中心部にある紫禁城の故宮博物院に在る宝物と、台湾の故宮博物院の宝物では、圧倒的に台湾のほうが優れている。極論をいえば台湾の宝物は超一級品だが、北京のものは一流品といっても台湾に在る宝物との差は格段に劣ると言われている。ちなみに「故宮」とは、本来「昔の宮殿」という意味だが一般に故宮といえは、明・清の宮殿だった紫禁城を指す。

清が滅んで10年以上経った1925年に、清王朝が持っていた膨大な美術品や宝物などが紫禁城で公開された。当時の記録では120万点もの文物だったとされる。

1932年に満洲国が成立した時点で中華民国の蒋介石は日本軍の侵攻を恐れ、これらの宝物を上海や南京に移送した。1945年に大東亜戦争が終結し、宝物類の一部は「北京の紫禁城」に戻され、一部は「南京や重慶」などに置かれていた。

その後、国民党軍と共産党軍の戦闘が激化。国民党軍は北京を離れ、大陸南部に展開し重慶を本拠地とする。この時点で蒋介石は、紫禁城や南京・重慶などの宝物から選りすぐりの超一級品ばかり約 70 万点を 5,500 個以上の木箱に梱包し、最終的に戦火の中を台湾に送っている。その木箱すべてが、完全に無傷だった。

これが台湾の国立故宫博物院で公開されている宝物である。

1945 年の大東亜戦争終結以降、中国大陸各地で国共の激戦が繰り広げられ、数百万人以上、一説には 3,500 万人の戦死者を出したとされる。国民党軍は終始、米国から支援され最新の武器・兵器を供与されていた。共産党軍は、その最新鋭兵器を強奪することにより少しずつ兵力を高め、やがて形勢を逆転させ国民党軍を大陸から追い出すことに成功した。共産党軍にとって国民党軍の武器弾薬は獲物だったのだ。国民党軍の物資はことごとく共産党軍に強奪されたのが現実である。

そうした状況下、故宫博物院に運ばれた 70 万点の超一級の宝物を眺めてみると、国民党軍と共産党軍の戦いを越えて、蒋介石と毛沢東の間に何らかの「密約」が存在した可能性が見えてくる。

実はここに、想像を絶する世界史の秘密が隠されているのだ。

その秘密こそ「中国の未来…東アジアの未来…」を見通す鍵であると確信する。

—以下次号—

### **次号の予定**

- 西安事件の本質
- 蔣経国と鄧小平の関係
- 東アジアの価値観と西欧の合理主義
- 孫文の神戸「大アジア問題」演説の深奥
- アジア的価値観と西欧的価値観を結び付ける日本の立場

### **その先の予定**

- 金大中拉致事件の真相
- 日本と朝鮮半島の戦後史
- 北朝鮮問題の解決

### **更にその先の予定**

- トランプは現状を破壊する
- 緊張、混乱に陥れられる東アジア
- 東洋王道と西洋覇道の最終局面

(予定は多少変更される可能性があります。)